

経供養舞楽目録

令和二年十月二十二日 午後一時
於 聖 靈 院 西 側 庭 上

楽行事

藤原憲 (左)
蓮沼善行 (右)

振 銚

園淵和夫 (左)
寄氣惠秀 (右)

蘭陵王

小野真龍

登天楽

多治見眞篤 丸川司文
神田典証 今野宏昭

曲目解説

一、振 えん

銚 ぶ 三節

舞楽の演奏に当たって、まず最初に舞われる儀式的な舞曲である。もともと天地の神と粗先の霊に祈りを捧げ、舞台を清める宗教的な意味をもったものである。舞人は口に次のような鎮詞を唱えながら舞う。

「天長地久、政和世理、国家太平、雅音成就」

左右の舞人が一人ずつ出て、銚を上下左右に打ち振って舞う。まず左方の舞人が舞う。次に右方の舞人が替って舞い、最後に左右の舞人が同時に舞台に登り舞う。これを「合銚(あわせぼこ)」という。以上のように三度舞うことを振銚三節(えんぶさんせつ)といい、四天王寺では今もなお厳重に守られている。

一、蘭 らん

陵 りょう 王 おう

略して単に陵王ともいう。一人で舞う左方の走舞(わしりまい)として大変有名である。普通の舞は四人でゆるやかに舞うのに比して、面をつけ急な拍手で舞台を走り廻って舞うので走舞と称する。

古来この舞にまつわる伝説として、次のような話が伝えられている。古代中国の南北朝時代、斉の国に蘭陵王長恭(ちようきやうこう)という武勇才智に長けた王がいた。ところがこの王は、顔形が美しく優しく、戦場で威令が及ばないため、一計を案じて、いかめしい龍の仮面をかぶって周の軍と金燭城で戦ったところ、大勝を博した。その勇ましい姿を舞曲にしたものであるという。右手に金色の桴(ばち)を持ち、曲の最後に大きく前方を指す手があるが、これは三軍叱咤の姿であるといわれている。

この説話でいえば、曲舞ともに中国伝来のものということになるが、面や舞振りがタイ・ビルマの仮面に酷似している点、また曲の旋律がきわめて南方的な色が濃いことなどから、インドシナ方面より伝承されたものと考えられる説もあり、しばしば林邑(りんゆう)僧仏哲が伝来した林邑八楽の一つに数えられることもある。

一、登 とう

天 てん 楽 らく

この曲の由来については定かではないが、一説には天を目指して昇って行く龍の姿を象った舞であるといわれている。朝鮮半島伝来の舞楽の様式である右方高麗楽に属するが、この様式を借りてわが国で創作された舞であるとも言われている。まず箏、高麗笛の主奏者による序吹き(しよぶき)に次いで拍節的な楽曲に入ると、巻纓冠(けんえいのかんむり)に黄色地の袍を着けた蛮絵装束の四人の舞人が舞台上に現れ、順次出手(ずりて)を舞って所定の舞座につく。舞が始まると、手首を回転させる「ギロリ」や、腕を回転させる「フリガイナ」と称する舞の振りが繁く繰り返されこの舞の動きを特徴づけている。優雅な中にも軽快さを感じさせる舞といえる。

以上

総本山 四天王寺

舞楽参仕 天王寺楽所雅亮会
協 賛 天王寺舞楽協会